

河後森城(川後森城)(国史跡, 続百名城)(北宇和郡松野町松丸)

河後森城（かごのもりじょう）は、愛媛県北宇和郡松野町松丸に存在した日本の城（山城）。

概要

四万十川の支流・広見川と、さらにその支流の堀切川、鯛川に囲まれた独立丘陵上にある。山頂の本郭を中心に、二段・三段の平坦地が設けられ、馬蹄形に曲輪が設けられていた。

川原淵殿と呼ばれた渡辺氏が代々の居城としており、天文後期から天正年間にかけて機能した。天正8年（1580年）から翌年の間に、城主・渡辺教忠の近習だった芝源三郎が謀略により当城を奪っている。天正11年（1583年）の四国の役の後、戸田勝隆により芝源三郎は放逐された。その後、当地を治めた藤堂高虎は当城の天守を移築して板島城の月見櫓にしたという。慶長19年（1614年）に伊達秀宗が宇和島藩を創立した際、付家老の桑折氏が当城に入っている。その後、元和元年（1615年）の一国一城令により廃城になったとされる。

2017年（平成29年）4月6日、続日本100名城（179番）に選定された。

Wikipediaによる

城のかたち

河後森城跡（かごもりじょうあと）は、平成9年9月11日に国の史跡指定を受けた中世の山城です。

四万十川の支流広見川、その支流の堀切川・鯛川の三つの川に囲まれた独立丘陵上にあって、最高所の本郭を中心として、山の稜線部には馬蹄形に曲輪（くるわ：平地）が展開しています。

中央を南北にとおる風呂ヶ谷をとり囲むように、本郭から西は西第二から西第十までの九つの曲輪が、東は東第二から東第四、古城から古城第四の七つの曲輪が、さらにその南には新城の曲輪群が、階段状に連なっています。

城の歴史

城の築城の年代は不明ですが、主に天文後期から永禄期、天正期（1500年代後半頃）にかけて機能していました。当地域は当時、伊予（現愛媛県）と土佐（現高知県）の国境地帯にあって、黒土郷河原淵領（くろつちごうかわらぶちりょう）と呼ばれていました。永禄期の城主としては、河原淵教忠（かわらぶちのりただ）の名が残っていますが、この城主は、土佐一条氏一門から養子として入っています。

長宗我部氏の四国統一への動き、また天正13年（1585年）の秀吉による四国平定を経て、当地域を含む宇和郡は、戸田氏、藤堂氏、富田氏へと支配が移っていきます。特に藤堂高虎の時代には、河後森城の天守が板島城（現在の宇和島城）に移築されたという伝承が残っています。

慶長19年（1614年）、伊達秀宗（だてひでむね）が、宇和島藩を創立すると、付家老の桑折（こおり）氏が居城したといわれ、その後詳細は不明ながら、元和元年（1615年）の一国一城令の発布によって廃城になったと考えられます。

城までの交通アクセス

★JR予土線松丸駅下車、城の北側の永昌寺口（石碑が目印）から登城

★松山自動車道西予・宇和 I Cから宇和島方面へ約 40 km、城の南側の風呂ヶ谷口（駐車場あり）から登城
松野町教育委員会教育課（文化財係）による



